中村敬宇と宗教

小　泉　　仰

本論は、中村敬宇と儒教、キリスト教、仏教との関わりを考えることを主題としている。ただし儒教を宗教の中に入れることには異論もあるが、敬宇の天思想を一種の宗教思想と見ることもできるので、本論では儒教を宗教の中に入れておくことにする。

さて中村敬宇は、徳川幕府の二条城交番同心の中村武兵衛の長男として天保 3 年（1832）5 月 26 日に江戸麻布丹波谷（狸穴）で生まれ、幼名は釧太郎、後、敬輔、諱は正直、号は敬宇と言うが、私は敬宇という号名で主題の思想家を呼ぶことにする。

敬宇は、14 歳（1845）の時、昌平坂学問所寄宿寮に入寮を許され、佐藤一斉に師事して朱子学を学び、後に自ら昌平坂学問所教授に就任した。明治時代になると、中村敬宇は、明六社社員としても活躍し、明治 14 年（1881）には東京大学の漢文学教授に就任して活躍し、明治 24 年（1891）6 月 7 日に亡くなったのである。

敬宇は徳川時代末期の朱子学者であった時代から、すでに西洋文化に深い関心を持っていた。慶応 2 年（1866）、徳川幕府がイギリスに留学生を送る計画を立てたとき、敬宇は幕府に対して自分が留学したいという希望の願いを出して、次のように言っている [1)]。まず敬宇は天地人に通じることが儒学者の役割であると主張し、西洋の学を理解することが儒学者である自分の役割でもあると言い、自分が留学して西洋学を学ぶのに適任であると主張した。

敬宇によれば、西洋学とは、形而上の学、つまり文法学、論理学、人倫学、政事学、律法学、詩詞楽律絵画雕像の芸を含んでおり、彼の言葉で性霊の学と言われる。それは人文社会科学の領域を指すが、その領域の学問を十分に心得る者が日本の学者にいないので、朱子学を十分に取得した敬宇自身が留学してこれらを学ぶ必要があると主張した。こうして中村敬宇は、留学を許されたのである。

留学を許された敬宇は 34 歳の時、慶応 2 年 10 月（1866）、若い留学生 12 人の取締役としてロンドンに到着した。敬宇は、ロンドンに在住したまま、イギリスのキリスト教、政治、経済、法律などを含めた、いわゆる英学を集中的に学んだのである。

ところが、周知のように、慶応 3 年（1867）に徳川幕府は朝廷に大政奉還をし、その翌年の 1868 年に明治元年と改められた。そこで、ロンドンにいた敬宇は、急遽帰国することになり、船でロンドンを立ち、明治元年（1868）6 月 21 日に横浜に到着した。

彼は昌平黌の教授という身分を失ったが、徳川家の江戸から静岡への移住に伴い、彼も明治元年（1868）8 月に静岡に移転し、漢学ならびに洋学を教える徳川家の静岡学問所の漢学の一等教授となった。この時期に敬宇は、『敬天愛人説』（明治元年 :1868）と『請質所聞』（明治 2 年 :1869）[2] という、その当時の敬宇の思想を表明する重要な白文体の文章を書いている。

敬宇の『敬天愛人説』

『敬天愛人説』は『敬天愛人説　明治戊辰』（1868 年）と『敬天愛人説』の二部からなっている。前者には敬宇がこの小論のために参考にしていた漢籍が列挙されている。それらの漢籍は、書経、説命、詩経、論語、孟子、張横渠、朱子、薛文清、貝原益軒、西銘、魯恭、真西山と言った漢籍である。第二部では、彼の考える敬天思想と愛人思想が展開されている。特に『敬天愛人説』の第二部に敬宇自身の思想が展開されているので、まずこの第二部分について説明することにしよう。

この小論のなかで、敬宇は敬天愛人という統一概念を提出したが、これは日本では最初で且つ彼の独創でもある。もちろん彼が学んだ儒学思想には、敬天と愛人という概念が別々の概念として使用されていた。敬宇は、この別個の概念を統一概念とした最初の人である。しかし彼の敬天愛人思想には、もう一つの根拠として、イギリスで体験したキリスト教の聖書が考えられる。敬宇は聖書の箇所を特別指摘してはいないが、敬天愛人の聖書的根拠は、マタイ福音書 22 章 37 節～ 39 節であろうと推察される。イエス・キリストは、ここで次のように二つの律法を語っている。一つは、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」という神への愛である。もう一つは「隣人を自分のように愛しなさい。」という隣人愛である。

敬宇は、イギリスにおいて、キリストが説いた神への愛と隣人への愛という二つの愛に深く共鳴して、儒学思想を土台としてその上にキリスト教思想を融合させ、敬天愛人という統一概念に凝縮したと推測することができる。

敬宇は、『敬天愛人説』の第二部で、天思想をさらに詳しく展開している。敬宇によれば、天とは、「我」つまり私を生んだ超越的存在であると共に、他人をも生んだ存在でもある。従って、人間同士は、天が生んだ兄弟どうしであるという関係を持つことになる。したがって、人間同士は、天を父として敬愛し、人を兄弟として愛さなければならないわけである。そこで敬天と愛人は緊密な関係があるので、統一的概念として捉えなければならないわけである。

敬宇の『請質所聞』

中村敬宇は、明治 2 年（1869）に『請質所聞』[3] を書いているが、『請質所聞』で、彼は天思想つまり神の存在論 Ontology を展開している。敬宇によれば、第一に神は「あらざるところなく、あたわざるところなく、知らざるところなし」と言う。つまり神を遍在の神

(omnipresence)であるとし、さらに全能の神(omnipotence)であり、さらに全知(omniscience)の神であると捉え、神を人格神的にとらえている。第二に、敬宇は、神を「至大無外、至小無内」の神として捉える。言い換えれば、彼は神を無限の神として捉えた。第三に、敬宇は、神を天地創造の神としてとらえる。敬宇はこの点を次のように述べている。

> 上帝は日月を造り、人物を造る。…けだし上帝は形象なくして、日月星地人物をして自ら形象をあらわしむ。…形象ある者の主宰となる。

第四に、敬宇は、神を「賞罰黜陟の柄を握る神」つまり賞罰を下し、功のないものを退け、功のあるものをあげ用いる権力を握る神として、つまり信賞必罰の神と考える。信賞必罰の天という思想は、儒学思想にもあり、『書経』の「天堂善に福し淫に禍す」がここで引用されているし、ここから律法も解釈されている。敬宇によれば、この賞罰は、この世の寿命の長短や、貧富だけを指すものではない。それは此の世だけではなく、後の世において、遅くなるか早くなるか明らかではないが必ず信賞必罰があると説いている。こうした敬宇の裁きの思想は、キリスト教の説く終末論的思想に近いとは言え、此の世の行為がどうであったかを重視する思想を含んでいる。この点で、人間が正しい行為を行い得なくても、神の救済の働きを認めようとする正統派キリスト教の神の福音的救済思想と異なる見解であり、後に敬宇がキリスト教から離反していく根拠の一つになった可能性がある。第五に、この小論『請質所聞』には、朱子学が天即理を主張するのに対して、天と理を区別しようとしている。敬宇によれば、天は全知、全能、遍在にして創造の神であり、理は、天によって生かされる存在にすぎない。ここで、敬宇の天思想は、朱子学の天即理という思想と異なっている。

では、神と人との関係はどう捉えられているのか。敬宇は程伊川の理一分殊という考えに近い考え方をしている。つまり神は一つであるが、その一つである神が人間一人一人の「天良の心」つまり良心として別々に分けて与えられていると言う。敬宇はこの点を次のように言う。「人々の天良の心は、これを上帝の一部となすは可なり。合してこれをいえば、唯一の上帝なり。分かちて言えば、すなわち、無量百千万億の上帝なり」と言い、さらに「上帝の霊と人の霊とを通じてこれ一物なり。上帝の霊は万珠の一本なり。人の霊は一本の万珠なり」とも言っている。言い換えれば、敬宇の言う神は人間一人一人に内在しながら、しかも一つなる神であるとする神内在論（Immanentalism）の思想を取っている。

さて、私たちは『敬天愛人説』と『請質所聞』について敬宇の神思想を眺めてきた。一言で言えば、彼の思想は一部で朱子学的な思想に立ってキリスト教思想を解釈しているが、他方で、神と人とは通じて一つであり、神は人間に内在する神でもある。そこで、自己を省みることから、直ちに神に出会うことができるという神内在論の特色を持っているわけである。そこで、正統派キリスト教の説く神が人間を超絶した超越的存在であり、しかも人が神の被造物であるという超越神論（Transendentalism）とは異なっている。こうした相違を持ちな

がら、敬宇は、明治 3 年から明治 7 年 12 月 25 日までは、キリスト教に接近していった。

スマイルズ、クラーク、カックランと敬宇

中村敬宇がキリスト教に接近して行くのに大きな影響を与えたのは、彼が静岡滞在中にサムエル・スマイルズ（1812-1904）の *Self-Help*（『自助論』）を明治 4 年（1871）[4] に訳していることにも関係している。この本の中で、敬宇は、『西国立志編後』という注をつけているが、ここで、彼は、次のように言う。

> 徐にその政俗を察するに及び、…百姓の議会最も重し。諸侯の議会これに亜ぐ。その衆にえらばれ、民委官となる者必ず学明らかに行修まれる人なり。天を敬し人を愛する心ある者なり。己に克ち独りを慎み者なり。その俗はすなわち上帝に仕え礼拝を尊び持経を尚び好んで貧病の者を調済す。…その皆自主独立の志あり、艱難辛苦の行あり、天を敬し人を愛する誠意に原ずき、もってよく世を済い民を利する大業を立つるを観る。

敬宇は英国の繁栄の根底に、天を敬し人を愛する人々が政治を行っており、そうした人々は言い換えれば深いキリスト教信仰によって支えられていると見た。

さらに中村敬宇は、明治 5 年（1872）には、J.S. ミルの *On Liberty*（『自由論』）を『自由之理』[5] という題名で翻訳出版した。この本も明治初期には多数の読者を得た。この訳業は、敬宇が宗教の自由を獲得するための手段であったと彼は告白している。因みにこの宗教信仰の自由が日本で成就したのは明治 6 年（1873）であった。

ところで、静岡在住中の敬宇が、静岡学校の教師として化学と物理を教えに来たクラーク（E.W. Clark）と交際していることも、敬宇のキリスト教接近をもたらす原因の一つになっている。クラークは、徳川藩静岡学校の教師として招聘されて熱心に教育に専心しながら、同時にカナダ・メソジスト派の熱心な信徒であったので、静岡で聖書研究会を組織して熱心に教えたが、敬宇はこの研究会にも参加して、聖書を学んでいた。

ところで、明治 5 年（1872）、大蔵大輔であった井上馨は、中村敬宇を大蔵省翻訳御用の役割を与えて上京させたので、敬宇は、小石川江戸町大曲に居住して大蔵省に仕えた。彼はこの自宅敷地内に私塾同人社を立てて、青年を集めてキリスト教的な教育を開始している。この時にクラークも一緒に東京にやってきて、この同人社で教師の役割を果たしている。ここでもクラークは聖書研究会を開くが、敬宇はこの研究会にも熱心に出席したということである。

さて、敬宇は、明治 7 年（1874）1 月 4 日に横浜のユニオン教会でカナダ・メソジスト派の宣教師カックラン（G. Cuchran）が行った説教を聞いて感銘を受け、同人社にあった教会にもカックランを招いて説教をさせている。こうして明治 7 年 12 月 25 日、敬宇はカック

ランの手で洗礼を受け、正式に東京メソジスト教会の会員となったのである。

ところで、敬宇には、明治 9 年（1876）2 月 1 日から明治 19 年（1886）12 月 29 日までに断続的に記された日記『敬宇日乗』[6] がある。これは現在静嘉堂文庫に自筆本として残されているが、この日記の中に、カックランの名前が最も良く出てくるのは、明治 9 年の『敬宇日乗』であり、この頃、敬宇はカックランと親しく交際していることが判る。

ところが、カックランは、明治 12 年 3 月にカナダに帰国して、明治 17 年に再び来日したが、敬宇はカックランと親しく交わったのは、カックランが一時帰国するまでの明治 12 年までであり、敬宇は再来日したカックランとはあまり交際していない。

中村敬宇と『天道遡源』

次いで敬宇と『天道遡源』[7] との関係について述べることにしよう。『天道遡源』とは、アメリカの長老派教会に属する宣教師で中国で宣教していたウイリアム・マーチン（William Martin）が、中国名で丁緯良と名乗り、1854 年頃に書いた伝道書である。この本は、大変わかりやすい中国語でかかれているせいで、人々の間で大分読まれた書籍である。さらに幕末の頃には漢文で書かれていたせいで、日本でも武士階級の間で読まれていたと思われる漢書であった。恐らく敬宇も幕末には手にしていた書の一つではないかと考えられる。敬宇は、明治 8 年 11 月にこの漢文に訓点を振って出版した。私自身は、この漢文本の明治 14 年 6 月にロンドン聖教書類会社から出版した本を持っているが、その本は『中村敬宇訓点　天道遡源　全』81 丁＋ 4 丁（170 ページ）という和綴じ本である。

この本の内容は、大変易しくキリスト教学を解説したものである。この本は、上、中、下の三巻からなり、上巻と中巻は、神の存在を証明することに力点が置かれている。下巻は復活思想、原罪、イエスの贖罪、聖霊、信仰義認、信仰者の修養、祈祷の必要などが記されている。いわば、大衆的なキリスト教紹介書である。中村敬宇は、この本に訓点を振ったが、彼自身には、受け入れがたい教義もあったと思われるので、それらを指摘しておきたい。

『天道遡源』の著書の中で、中村敬宇がなかなか受け入れ難かった思想は、次のようなものである。第一は、復活思想である。この思想は、下巻二章に展開されている。第二は、原罪思想と原罪の子孫への波及という思想である。また下巻六章にある信仰によって義認され、救いが実現されるという信仰義認の思想も敬宇には理解しがたかったのではないかと思われる。これらの思想は、彼の書いた『敬天愛人説』と『請質所聞』には出てこないのである。

中村敬宇の社会的地位の向上と信仰の低迷

敬宇は明治 8 年（1875）に東京女子師範学校摂理嘱託に任ぜられ、さらに明治 10 年には東京大学文学科嘱託として任命され漢学の教鞭を執っている。明治 12 年には東京学士院会員に選出され、さらに明治 14 年には、東京大学教授に任ぜられて、その年の 9 月 20 日には従五位に任ぜられ、学者の地位も社会的に揺るぎないものとなっている。

ところで、明治 15 年（1882）は、カックランがカナダへ帰った年である。この頃の敬宇の信仰状態を見ると、明治当初の頃の熱心さが冷めていき、教会へ通ったり、聖書を読むことに些か義務として意識するような気分が見られる記事が見られる。明治 9 年の頃の熱心な信仰状態と比較すると、明治 15 年以降には、かなり冷え切った敬宇の信仰状態を推察することができる。

明治 15 年に書かれた敬宇の日記『敬宇日乗』[8] には教会礼拝のための安息日について、簡単な記事を記しているだけであり、特に 5 月 1 日の日記には、「余おもえらくまさに読経に努むべし。誦して時を費やすを厭うなかれ」と記している。これは敬宇が読経つまり聖書を読むことに時を費やすことをいやがってはならないと自戒している言葉を記している。この頃になると、敬宇は、聖書を読むことに対して、かなり嫌気をさしている気分を表明しているようである。

この頃、仏教者との交際が増えている。たとえば、明治 15 年 1 月 22 日、3 月 28 日の記事に、曹洞宗出身で後に東洋大学学長を務めた大内青巒との交際が見られる。また 9 月 1 日には日蓮宗池上本門寺の日昇が敬宇宅を訪れたことが記され、明治 16 年 1 月 2 日には、西本願寺系の島地黙雷の名前も見られる。

中村敬宇は、明治 16 年乃至 17 年頃に池上本門寺の日昇に対して漢詩を送り、その一部で次のように言っている。

> 衆教五色を現すがごとしといえども、太虚は本来同一の白なり。ああ余は学となすに西東に迷い、いまだ欲心を澄ませて玄宮におらず。紛々たる世事に歳月すぐ。碌々たる塵途にして学業空し。時に昇公を得て茅慮を叩く。快きこと襟を開き清風を受くるに比す。

敬宇はあらゆる宗教が種類を異にしているとは言え、本来の根本は同一の白であると断じて、聖賢仙仏のもつ慈悲の目は同じであると断定し、特別キリスト教を優先する見解を示していない。明治 15 年頃から敬宇は、キリスト教に対して一種の距離感を感じ始めたことを示している。

中村敬宇と R.W. エマソン

晩年の敬宇は、エマソンに強く影響を受け始めている。日本にエマソン思想が伝来したのは、明治 9 年（1876）、外山正一が英米留学を終えて帰国し、東京大学教授としてエマソンを講義し始めたことが最初である。中村敬宇も明治 10 年には東京大学で教えていることから、同僚として外山からエマソンの思想を知って、エマソンに共鳴し、深く傾倒したことと思う。そこで、明治 16 年（1883）5 月の大集会において、中村敬宇は、「キリスト教と文学」というテーマで講演を行い、日本のエマソンと称される程になったと言われている。敬宇が

エマソンに傾倒して行くことによって、彼は、キリスト教からますます離れて行くようになったのである。

そこで、ラルフ・ウォルドー・エマソン（Ralph Waldo Emerson）のことを少し触れておこう。エマソンは、1803 年 5 月 25 日、ユニテリアン派のボストン第一教会牧師の子としてボストンに生まれた。彼はハーバード大学神学部で修士号を取得して、1829 年、ボストン第二教会から牧師として招聘されて、副牧師となった。彼が牧師として勤めていたとき、彼にとって大きな牧会上の問題となったことは、聖餐式の問題であった。ユニテリアン派教会でも、聖餐式は、教会の儀礼として守られていたが、エマソンの自発的な魂はこうした儀礼を守ることができなかったのである。

エマソンは、1831 年の礼拝説教で『主の晩餐』（“The Lord’s Supper”）[9] という説教を行い、ボストン第二教会牧師の職を辞任したのである。彼はこの説教の中で自身の意見を次のように主張している。第一に、彼はキリスト教会全体の中で、主の晩餐について一致した見解が成立していないとしている。第二に、イエスには、掟として聖餐式を制定しようという意図は全くなかったという。従って、現在のような形式で聖餐式を行うことが適切ではないというわけである。第三に主の晩餐を行うことによって、礼拝は神に捧げられず、キリストの記念に捧げられることになり、真神への礼拝意識が権威によって上から人間に課せられてしまっているというのである。

ユニテリアン教会は、唯一の神のみを認めている。しかしこの会派はイエス・キリストを人間としてのみ認める宗派であるから、正統的キリスト教神学が説く三位一体論を拒絶し、キリストを礼拝することが人間を礼拝する偶像礼拝と同じだというわけである。こうしてエマソンの神学もキリスト礼拝を避けようとしたのも当然であった。こうした主張に対して、ボストン第二教会は、エマソンに反対したので、エマソンは教会牧師を辞職し、その後、自由思想家としての道を歩むことになったわけである。エマソンのイエス像は次のようなものである。

> イエスはこうした〈真理、正義、愛など〉の道徳的情操の中に生き、世俗的な運不運に無関心であり、ただこれらの情操の表現だけに注目し、これらの霊魂の属性の本質から永続の理念を分離したことはかつてなく、霊魂の永続について一言でも語ったことはない。道徳的要素から霊魂の永続を切り離し、霊魂の不死を教義として教え、それを証拠によって主張する仕事は、彼の弟子達にゆだねられたのである。

言い換えれば、エマソンは、正統派キリスト教神学の説くイエス像から彼の直感したイエス像を切り離して、霊魂の不死説を全く説かず、終始道徳的情操の中に生き抜いた人物としてイエスを語ったのである。エマソンによれば、真実のイエスは、権威に守られた存在ではなく、自己自身の内側からほとばしり出るものを大切にした人物であった。イエスが人間の

心情に語りかけるすべての思想が啓示するものを人間が学んで行き、「至高者」（The Ultimate）が人間のうちに内在していることを自覚させるように導いていると言う。この至高者を自分の内に発見するために、人は自分の部屋に閉じこもり、すべてを捨ててイエスに従うことを命じていると説いている。イエスは、人々の自己のうちに潜む自然の源泉つまり至高者に立ち返ること、これこそ神に立ち返ることだと説くのである。これがエマソンの神学であり、キリスト論である。

こうしたエマソンの思想は、“Over-Soul”（大霊）[10] の書で展開されている。エマソンの神は、人間のうちに潜む至高者であり、すべての人間に共通して存在するはずの非人格的で永遠の一者 impersonal, eternal One である。エマソンの神概念には、イザヤ書 45 章 15 節に見られる「貴方は隠れた神」（atah el mistater）という超越神論（Transcendentalism）の神ではなく、神内在論（Immanentalism）の神であると共に、非人格存在である。従って、超越神と人間との間を和解させる役割を果たすキリストの存在を神のペルソナの一つとして認めることはなかった。言い換えれば、エマソンは、神のペルソナと一つであるイエス・キリストという存在を必要としなかった。

ちなみにエマソンによって、1841 年に出版されたシリーズの “Self-Reliance”（『自己信頼』）[11] の主張は、エマソンの内在神論と自己信頼の思想を明言している著作である。中村敬宇がエマソンの内在神論に触れたとき、敬宇が幕末時代から信奉していた儒学思想の根底にあった思想をそこに再発見したに違いない。エマソンは、また 1841 年に出版したシリーズの中に *Compensation* を著述している。中村敬宇は、このエマソンの小論を『報償論』[12] と題して漢文で訳出している。

こうしてエマソンに影響された敬宇は、正統派キリスト教から遠く離れてしまい、最終的には、内在神論、といっても人間の内に内在する非人格的普遍的精神原理に到達し、儒学、仏教に共通する思想に戻って行ったと言うことができる。

人間が行う善悪に応じて、必ず応報として永生と永苦が準備されているという敬宇の見解は、エマソンのように、この現実の世の中で、すでに応報がなされているとする説ほど徹底してはいないが、終末の時の救済の条件が、人間のこの世における善悪の行為に対応するという一種の応報思想を示しており、プロテスタント・キリスト教神学の信仰義認の説とは真正面から衝突するものであった。これは儒教の書経のうちに展開された「天道善に福し、淫に禍す」という敬宇がよく引用した主張と同じである。

晩年の敬宇の漢詩に表れた宗教思想

敬宇は、明治 24 年（1891）6 月 7 日に亡くなっているので、明治 20 年と言うと、敬宇の晩年である。この時期に敬宇は、多くの漢詩を作っているが、それは『敬宇日乗六』と『敬宇詩集巻之四』[13] に掲載されている。今それらのうちの幾つかを取り上げて、それらの漢詩から彼の宗教思想を読み取っていくことにしよう。最初は明治 20 年 12 月 8 日の漢詩で

ある。

回教と耶蘇といずれか軒をおもしとするや。すべてまさに主宰の真尊をつくらんとす。似て非なる天道欽崇の外に、別して自ら乾(けん)を開き、且つ坤を闢(ひら)かんとす。

イスラム教とキリスト教のいずれかが正しいのか。いずれも自らの派の主宰を造り、自分の方が正しいと主張しているようなものだというのである。同じく同日の漢詩に敬宇は次のように言う。

人身ただ目前の今に活く。過去は追いがたく死に沈むに同じ。未来もまたこれ未だ事を生ぜす。輪回生滅の心を逐うなかれ。

この漢詩では、敬宇は、仏教のいう輪廻転生、生滅の心を追い求めることなく、現在の時点での人間の活動に力点を置くように勧め、現在こそ人間の活動の意味があるという考え方を示している。この漢詩によれば、敬宇は、現在の瞬間に応報が行われるというエマソンの思想に接近しているように見える。同じ日付けで、敬宇は次のような漢詩も読んでいる。

人間の富喜は草頭の露。万恨千愁の涙襟をぬらす。別に造る華厳世界の海。この広大無辺のこころを養う。

ここでは、敬宇は人間の富も社会的地位も朝露が草の葉に宿るようにはかないとし、そのための悩みは果てしないとして、無情の世界からの離脱を仏教的華厳の世界に求めている心境を語っている。敬宇は晩年にはエマソン、仏教、儒教と種々の思いに引きずられて、悩んでいるということができる。さらに同日読んだ漢詩に次の詩がある。

各派は宗祖のこころにしたがわず。たがいに相争鬩(そうげき)して、今に到る。区々としてここに借り、私利を謀る。

この漢詩で、敬宇は各宗派論争を問題として指摘し、各派は自己の利益のみの追求を謀るだけであると断言している。さらに続けて、敬宇は次の漢詩を作っている。

妙悟してすべからく本根に透るを期すべし。名相を迷いて、紛煩を致すなかれ。万里の烟霧排除しつくし、鷲嶺まさに懸かる月一痕。

すべての宗派の論争対立を超越して心の本源に達し、雲霧を払い去って、最終の境地に到

れば、釈迦が説法した鷲嶺山にかかる月一痕のさとりの境地に達すると歌っている。さらにこうした境地に達すると、善も無く悪も無い色即是空の境地に達すると歌うのである。

> この身は有にあらず亦無にあらず。悪なく元来善もなし。色即是空空即色。破る有りまたほろぶる無きに過ぎず。

明治 20 年 8 月 11 日の漢詩を見よう。

> 易に太極すなわち真神と言う。この外に元来神有るなし。もし遠きをおいて終わりを慎むの意を論ずれば、神亦これ人人亦これ神。

敬宇は、この漢詩に註を打ち、次のように言う。

> 太極の生生を指して一元気という。太極の条理をさして天理という。太極の霊妙を指して神という。名を異にしてものを同じうす。しこうして万物の総称なり。天地万物の外、別に真神なし。この詩は吾が心を護るを先とす。

儒教の易経のいう太極を神とし、この太極を分有する人間万物も結局は神となると論じ、儒教的であると同時に仏教のニルヴァーナ、さらにエマソンの非人格的神である永遠の一者としての大霊（Over-Soul）と共通の思想を展開している。敬宇においては、儒教、仏教、エマソンが混然一体となっているように思われる。

まとめ

中村敬宇は、その一生の宗教思想を概観して見ると、明治 7 年 12 月 25 日にカックランによって洗礼を受けたが、明治 16 年ないし 17 年くらいから次第にキリスト教から離反していき、彼の若い時代の儒教思想、さらには晩年において交わりをもった仏教者からの影響を受け、さらにはエマソンの影響を受けて、結局キリスト教から離反したのである。この基本的な原因は、敬宇がイエス・キリストとの出会いを欠いていたことが第一原因であると思われる。彼の著作にはどこにもキリスト論が出てこないのである。結局敬宇は、イエス・キリストと出会うことはなく、最終的には日本古来の儒教、仏教の世界に戻って行ったと言うことができる。こうした宗教思想の出戻り現象は日本人の基本的な思想の典型の一つであろうと考えられる。

注

1) 中村敬宇「留学願存寄書付」1866 年、大久保利謙編『明治啓蒙思想集』筑摩書房、1967 年。

2) 中村敬宇『敬天愛人説』大久保利謙編『明治啓蒙思想集』筑摩書房、1967 年。
3) 中村敬宇『請質所聞』（自筆本）静嘉堂文庫所蔵。
4) Samuel Smiles, *Self-Help*, London: John Murray, Albemarle Street, 1858. 中村敬宇訳『西国立志編』静岡版、1871 年 7 月。中村敬宇訳・サムエル・スマイルズ著『西国立志編』講談社、1981 年。
5) 中村敬宇訳『自由之理』同人社、1872 年。
6) 中村敬宇『敬宇日乗』（自筆本）静嘉堂文庫所蔵。
7) 『丁韙良著　中村正直訓点　天道遡源』倫敦聖教書類会社、明治 8 年（明治 14 年版使用）。
8) 中村敬宇『敬宇日乗』（自筆本）静嘉堂文庫所蔵。
9) R. W. Emerson, *The Lord's Supper, Selected Prose and Poetry*, Introduction by Reginald L. Cook, New York: Holt, Rinehart and Winston, 1950.
10) R.W.Emerson, *The Over Soul, Self-Reliance, and Compensation*, *Works of Ralph Waldo Emerson*, New York: Columbia University Press, 1939.
11) R.W.Emerson, *Works of Ralph Waldo Emerson*, New York: Columbia University Press, 1939, 11-21.
12) 『報償論』大久保利謙編『明治啓蒙思想集』（明治文化全集）筑摩書房、1967 年。
13) 中村敬宇『嶽南集』『敬宇詩集　上中下』静嘉堂文庫所蔵。中村敬宇『敬宇文集巻之一～巻之十六』吉川弘文館、1903 年。